

リヤカーリー引いて四万キロ

河合 雅雄

一九八二年、カムルーン南部の熱帯雨林でわたした

ちはマンドリルの調査をしていた。そのとき、突飛なことを敢行している男の噂を聞いた。一人でリヤカーリーを引き、ケニアのモンバサを出発してアフリカを徒步横断し、ついでサハラ砂漠を徒步縦断してパリまで行くとしている男がいるというのである。

聞いていた口がふさがらない、というのはこういふことだ。単独徒步、自転車やバイクならまだわかるが、どうしてリヤカーリーなのか？ 雨季の悪路や砂漠をリヤカーリーを引いて歩くのはわざわざ困難苦労を買うようなものだ。第一盗まれるに決まっているではないか。無謀というよりも狂気の沙汰に近い。案の定、ナジエリアのカノで、リヤカーリーと持ち物の全てを盗まれたと聞いたときは、同情よりも当然のことが起つたといふ感じだった。

この五月三日に、その人に会った。再度リヤカーリーを引いて挑戦し、一九八九～一九九〇年にかけて三七六日間ひたすらリヤカーリーを引いてアフリカ大陸を横断つてサハラ砂漠を縦断、パリまでの道程一万一一〇〇キロメートルの踏破を成し遂げた。その壯舉に対して植村直己冒險賞が与えられた。わたしはこの賞の審査員をしているので、授賞式でその人永瀬忠志さん（五〇）

歳にお会いしたというわけだ。

かつてアフリカで、滑稽で馬鹿げてる、無茶苦茶だとそしつた人の儀業を称えて会う不思議な縁を感じながら、実際に会つてみてまた驚いた。二兎をもつ礼儀正しく紳士で柔軟な微笑が魅力的だった。サハラ縦断の苦労話などの受賞講演には一同感銘を受けた。余り苦しくて「止めたい、なぜ歩くのか」とずっと思い続けていた。しかし、止める理由が見つからない。全部盗まれたとき、ほつとした。止める理由が見つかったからだ。だが、なぜ再度挑戦し、またなぜリヤカーリーを引くのか。それは身体酷使の極限を通して一覗訪れる自然の美しさ、神秘的な感動、人ととのふれあいのよろこびにあるといつ。

その後も、タクラマカン、「ビ」、カラハリ各砂漠横断、南米縦断など全長四万三〇〇〇キロメートル余りを歩き続けたりヤカーマンの不撓不屈の冒險心には頭が下がつた。全て自己資金というのがすごい。

植村直己冒險賞は、彼の故郷日高町（現豊岡市）が始めた今年で一〇周年、受賞者は皆永瀬さんに劣らずすばらしい冒險者たちだ。安心と安全の卑小な自己中心の壁にこもる無気力な若者が増えてる現在、このような冒險者の存在は貴重である。もう一度「若者よ大志を抱け」そして「冒險者であれ」と叫びたい。

かわい まさを／1924年兵庫県福山市生まれ。京都大学理学部動物学科卒。理学博士。京都大学靈長類研究所教授（所長）、兵庫県立人と自然の博物館長など歴任。京都大学名譽教授。著書に『少年動物誌』『小さな博物誌』（産経児童出版文化賞）『人間の由来上下』（毎日出版文化賞）『河合雅雄著作集13巻』など。朝日賞、紫綬褒賞など受賞。



目次

SEPTEMBER 2006
月刊みんぱく 9

- 01 エッセイ 世界へ世界から
リヤカーリー引いて四万キロ
河合 雅雄
- 02 特集
更紗今昔物語
—ジャワから世界へ—
吉本 忍
- 03 未来へひらくミュージアム
自由と秘密を抱きしめて
—魅惑のミュージアム—
塚田 美紀

- 11 表紙モノ語り
アフリカン・プリント
吉本 忍
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 人生は決まり文句で
旅すれば見つけものあり、
居座れば種尽きるのみ
坂田 卓
- 15 時論・新論・理想論
「植民地」時代の研究遺産
三尾 柚子
- 16 外国人として生きる
韓国人嫁さんの田舎暮らし奮闘記
金 美善
- 18 地球を集め
資料収集から始まつた
楽器遍歴の旅
山本 紀夫
- 20 生きもの博物誌
大衆魚のムロアジ
小野 林太郎
- 22 フィールドで考える
鉄条網のなかの中華料理店
市川 哲
- 24 企画展
東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所
臺灣資料展
一九三〇年代の小川・浅井コレクション
を中心として
次号予告・総集後記